ampp-024

世界樹の断面

中田満帆

2024

a misasing person's press

『古今和歌集』に、ただ一首収められた酒井人眞という男が、それだけで千年以上も名を残していることが羨ましくてならない。

この『世界樹の断面』にも、ただ一首、〈暗黒理力〉の渾融によって千年は残りそうなのがある。

それはどれか言わないでおこう。

森　忠明

もくじ

＊
theme 5
美しい仕事 20
間奏曲 35
世界樹の断面 49
スモール・タウン 58
ルードボーイたち 77
蝦蟇眠る 93
＊
あとがき 106
＊

theme

＊ギリシア語tithenaiに由来し，〈置かれたもの〉を意味する。――『世界大百科事典（旧版）』より

夏の嵐　かぜにまぎれて去るひとかげを追っていまだ正体もなく

so I knew, くちごもりつつテレビにて深夜放送受信が終わる

ぽっかりと暗くなりたり郊外の花を摘みゆく女がひとり

やがてまたぼくが終わろうとする夜に蝉のぬけがら一切を拒む

青嵐去って一輪挿すだけの花壜がひとつ行方不明

That’s a bloom, やがて消え去る色たちに報いるために死など撰ばず

俳優も暗喩に過ぎず夜がまた建築されし炎天の星

駅じゅうにおなじ女が立ちふさぐ地上に愛はなしと識りたり

夏またぎ　自転車通る一筋の車輪の跡が光るゆうぐれ

雨光るルーフの上の蟻たちが落ちてゆくなりせつなの彼方

箒すら刑具おもわす蒼穹(あおぞら)に逆立つ藁の幾本を抜く

夏盛る空気人形一体が陽に焼かれつつおれを視るなり

ソフトボールする少女らがいて茫洋たるグラウンドにあふれり

死ぬためのこころがまえもままならず驟雨ののちの室外機啼く

”Cabaret London” 滅後の愛をいつわりし女主人のヒールが高い

めぐりたりる星の羅針が定まらぬきみの両手の運命線よ

声あらば吼えよという声がして一瞬夢のなか立ち止まる

探してる　きみの匂いがまだ残る街のはずれの未舗装道路

ゆうづきの充ちる水桶ゆれながらわれを誘う午後の失意よ

手鏡を失う真夏・地下鉄の３番出口写したままで

夏が来る　金魚の群れの死するまで鰭濁るまで語る悲歌なし

もしぼくがぼくでないならそれでよし住民票の写しを貰う

悲しみが澱むまでには乗るだろう17系統のバスはまだ来ず

よすがなどなくてひとつの花を折るてごころもない七月のおれ

ぼくばかりが遠ざかるなり道はずれいま一輪の花を咥える

痛みとは永久の慰みいくつかの道路標識狂いたるかな

なにがまたぼくを咎めるだろうかと街路樹たちのささやきのなか

きみのいまがラージサイズのペプシとして再現される観客席よ

美しい仕事

夏の花おうまがときに咲き誇るパークサイドの街灯のなか

まなざしの光りのおおく吸われゆく雨期の花咲くみどりの小径

うそがまだやさしい真昼　緊縛のバニーガールをひとり眺むる

歌碑を読む老人ひとり古帽のかげに呼ばれてやがて去るなり

十七音かぞえながらか指を折るひとりの少女図書館に見る

季語忘る夜のベッドよなぐさみにならぬあかときわれを焼くのみ

視るたびに顔がちがってゐるくせにおなじ声音で話すかの女ら

おもいでもあらじと云いてさみしさもうつくしきかなきみのやまなみ

みささぎにかかる光りかおれたちの過去などまるでなかったようだ

海を売る少女ありしか炎天にかかる雲さえきょうは悲しい

宇宙という裁きもありぬ銀河にて名づけられたる朝の咎人

語りとは声の残滓かものがたるひとのかげ読む通訳士たち

かぜまじる　初夏の嵐よひとびとの営みなどがわれを惑わす

かぜわたる　区画整理の跡地にて老夫のひとり杖を投げたり

とことわの花野のありしか炎天の素人土工の頭蓋啼きをり

青嵐来るにまかせて夏草の束をくすねてわれを慰む

ベルボトム逆さに吊す夏の夜の猥語のごとく愛しきものら

はつ夏の水を眺むる凡夫たるゆえなど知らぬ清掃時間

われもまたあたまさげさしひとにみな死ねと祈りし清正人参

鞭のように蛇ぶらさがる樹木あり『美少女図鑑』ふと落としたり

方代の額髪青き時代なぞ午睡のなかにひとり現る

よこがきの思想ばかりが照らされて拝むひとあり　神の莫迦珍

うつくしき仕事ありしか夏の日の父を殺せしわが夢のうち

ドニ・ラヴァンを兄と呼びたきいちじつを生きて羞ぢることもなき夏

少なくていいのだ　だれも引き受けぬ如雨露のなかの残り水など

抱えては深くジャンプす　死の色はみなおなじとうあじさいの束

やがて世が夢だと気づくこともあれ　革財布に護符を入れたり

間奏曲

ひぐれまの悪魔のようだ　ガス器具の異常警報鳴りやまぬなら

風をまねくひとのようだと誤解して電線工夫の仕草を見つむ

境内を歩む女のひとがいう「神はあなたを見放したのよ」。

ものおもうことのさみしさ道の果て屁糞葛の語る真実

耳鳴りが止まない帰途よ夏の夜の博覧会はまたなお寂し

枕木のつづく地平に暮れかかる雨雲ばかりわれを慰む

乱切りの茄子を算える夏の夜の空調さえもわれを咎めて

ルー・リードの詩集を買わん　ニューヨーク・シティの雲が沸き返るなか

世の光り　われと他者とをへだてたる情景ばかり眼にて残らん

……だったっていうおもいも告げず室に坐す夜香木さえ濁れるときは

ああ、ともに交じることなき余生あり　セントルシアの夏の妹

憂さ充ちる室の時計に釘を打つ姦夫のごとき一連の業

「星幾たびもめぐる」ならその物語を売ってください

誤解というたがいちがいの道歩む存在たちの雲は寂しい

この雨はつづく　炎がたちあがる心の澱を塗りつぶすまで

此処に願うことなし朝顔のようなひとさえ隣におらず

虚心にて水面を撫づるようにしてミカドの歌に芯などあらじ

愛子内親王の眼のなかをしらじらと三十一文字の呪学はありぬ

牡牝のちがいはあれど過ちは等しくわれの友人なりぬ

国産みの伝説さえも生け贄にするがいいさとおのれの古事記

木々ゆれる　あしたのかぜを予感してわれの帽子はきょうも飛ぶなり

夢のなか鰯の群れに追われゆきＹ字路に立つ／ぎりぎりの家

馬果つることもなかりき草競馬見下ろすのみのわれの祝日

石を飼う女存りしやコクニーのような訛りで躾けるものを

炎昼に焦れるひと波一杯の水を浴みゐる胸汚すまで

よすがなどあらず水場に咲く花を剪る一瞬の夢が悲しい

世界樹の断面

夏の夜の空中庭園夢想する男のなかの熱病止まず

世界樹の断面ばかりかげがいもないものばかり奪われてゐて

パーラーのいちじつ暮れるおれがまだ苺ミルク待ってゐるのに

労働を拒むおれたち　夏はいま禁治産者の五月祭かな

運命を買いためて来し男ありダービーの日は『優馬』を読みぬ

……しかし、それがほんとうだって証なく草刈り鎌の刃錆ゐる

みなみどり夏のさかりの熱さえもいつわりなどとあえて云うなり

この場所にぼくがゐるのだ　真夜中の一人称をゆらす水風呂

花あんず　ゆうびらしさに解けてゆく卑語一覧のささやきのなか

孤悲というおもいちがいに囚われて身うごきできぬ夏の疚しさ

「神がまだゐない夜明けを歩きたい」二宮神社の境内に立つ

黄金の道よこたわる定めとう一語消し去る車を待てり

きりぎりと鋸を挽くひといずれかの未来になんの期待も持たず

つちのえの男が匂うスーパーの閉店時間とうに過ぎたり

赦しなくてまだ立ってゐるよ門の錆の青ばむまでは

心なくて食堂をでる　ウェスターン・ドア羽ばたく夜のしじま

スモール・タウン

スモール・タウンつづく駅だらけわれをひとたらしむる窓越しのひとひと

土地騒ぐ宅地造成ボーリング・マシンの吼える声ぞわれ聴く

なぐさみはいらない　手水にぬらす両の手がすがしいから

ためらいはバラ科の果実　棘のごとわが口腔を緊(し)まる肉あり

天水のあふるる道を渡り来て六甲道にバス訪れず

つれもどす声などあらじ喫煙所撤去のざまを遠く見るのみ

あかときに樹は眠りたりしずかなる定型詩文のごとき水脈(みお)あり

「高価買取」広告看板しずかなる午後よ復讐演ずる女ありぬ

道道におもいだされる辱めがあってまだに赦せないものたちをおもう

石を抜く土工のひとり空調服のふくらみがやさしい時間

たとえばきみのはるかを流れるものありぬ精肉店の保冷庫

なにがなくとも季節の花は咲き乱れ神経症の発作うながす

かたほうの足をかばって歩き去るワンピースの色はやけに青い

おたがいのなぎを交わして輪廻する砂の城塞(おしろ)のあるところにて

群れたちにはぐれて生きる野の花に思惑なんぞ一行もなく

それぞれのなまえも知らず生きてゆく猿のようなひとなみ寂し

いくつもの眼をひらかせて蓮生(はちす)むいずれわれらを捕らえんとして

石を飛ぶからすの一羽過ぎてゆく視界のなかの暗黒理力

意味との和解叶わず水飲む　一連の動作・仕草を記録するおれ

枝葉ばかり幹が育たぬ公園の樹を眺めたる野良たちの午後

「ひとふりでシミ・ソバカスに効く」という広告貼られつつあり始発を待てり

猟犬にあざみと名づくひぐらしの声もまだせぬ一本の道

せめていまをとつぶやく女の子たちが飛ぶビニールの縄跳び

来し方をおもうことすらうとましく天日に曝す冷凍肉を

真夜中のサービス・エリア　かたほうの子供靴のみ発見されし

窓が飛ぶ　上昇率をあげる不安あってきみらしいまなざしが暗い

枝を折る　妬心のなかのさまざまを庭の欅にからかわれては

存在のやましさばかり漏水を受けるバケツがきょうも涼しい

躯体工事やがて夢のごとく終わりたりひざかりを歩く空調服の男たち

ＬＥＤ照明冴えるわが室のなかいつまでもつづく水の音聴く

炎天に立つ墓ひとり夜を待つ供う花さえなんだかかなしい

呼び声もなくて夜ふけに立ち止まる信号灯の点滅もなし

光りなどなくてひとりの厨にて陰茎冷やす盥の水よ

陽ざかりの輸送貨物が停車する・歯痛に悩む夏の午後２時

きみのまぶちが夏の光りに薄らいでたったいま時を刻んだよ

詩に淫すこともなかれば八月の縊死の牡犬駈け廻るなり

ルード・ボーイたち

鍵穴が合わない夕べ地階にて癌検診の通知受取る

裏階段上るだれかのかげをいまひとりじめする身勝手ばかり

布ひとひら浮かぶ人工河川やがて来るだろう裁きなど忘れっ

〈屠〉という字やがて葬らるる字なり夏の蝿集る場所もなくて

咲きそめる花は嵐か　従業員通用口に吹きだまるもの

愛の経験もなしに道ゆくわれのなかを走り抜ける夏のしぶき

パリ祭のルード・ボーイのごとくいま髪撫でつけるわがマグ・ショット

第一級殺人一報告ぐ画面冷たき切桃の罐詰をあくる暗い真午の室

だれだった？　かげ踏み遊び　誘い来る　群青色の男の子って

かえりきて上着を降ろす湿度計高まるなにが不安をあおる

横倒しのハーレーダビッドソン眠る路上にて遠巻きに小火騒ぐ隣人ありぬ

前線の雲もやがては見果つるに悪魔主義者もしずかに去りき

羞じらいもなくて眼をひらくひと／「きみのようだ」と通信回路

椿象（かめむし）のゆくえをおもう俎板のうえを這ってはじきに消え去る

ことば少なげに愛を語る男に遭っていまだぬぐえない背徳感

〈ミシガン〉という渾名の猫が飛ぶ夏の庭にて語る亡命

「この夜がいまに正しい昼となる」――夢の日記に書かれた科白

若さもてぬぐう汗かな少女らの悲歌すら遠き夜の二部観る

中央電算室爆発する真夏の朝顔さえ愛しい時間

なおも雲がつづく道の果てわずかながら願いなど持ちぬゆうぞら

どこかでいれちがうひとがゐる駅のなかを漂う空洞としての時刻表

夜泣きする子供の声が悲しげなときがつづいてひとりつまづく

ゆくえ知れずの夢――「アメリカ」を追跡する大暑のなかをさまようがまま

〈L’America〉と歌う男よ、黄金に代わるものなどこの土地になし

荒れ野にて花が咲いたよ／きみが持つ神託なんぞなかったように

夏の雲に夾まれてゆくぼくよぼくよと一人称解体できぬ真昼

生田川インターちかく主婦たちが降霊術を学ぶ木の洞

Lie Lie Lie／やがてものみなうそとなる第二級河川反逆したり

サイレンが祝詞のように鳴り渡る駅また駅の神も欠伸す

蝦蟇眠る

一篇の詩さえも痛苦　根菜のまっかな茎を嚙るみたいだ

トマト罐落下を見つむわれひとり爆発望み／夏は去りゆく

唇をそっと切るような調べかなゆうなぎはるか迫るを待てり

なにが　なにがきみをかりたてるのか　秋の兆しにあとずさるのみ

萩の花咲くを待ちをり残暑にてふくらはぎまで水浸しなり

ゆく夏にとり残されて汗を掻く知羞草（おじぎそう）さえなにも云わない

抱えたつものもなかりき荒れ野にてだれに捧ぐる歌なぞも存らず

……と、おもえてならず夏の根の枯れていっぽん死ぬまであがく

云いわけのかさなるゆうべそれぞれの場所を報すはバードコールよ

云いつのる不安ばかりが高まれり残暑のなかの電波塔たち

かのひとの不在をおもう漏水の修理終わらぬ地下道にさえ

もはや愛などいらぬ両の手で水を掴んだ一瞬の夏

みみずくの眠りのなかに迷い来し男は高所恐怖症なり

暮れなずむ夏のゆうべを歩きゐてふいに落ちたり護符のひとひら

灼かれをる男たち現場作業終わらぬ週末　まだ眠い

ふみいそぐ叢寂し　うしろから大人のおとこどうどうとして

定時制女生徒眠るバスの席　わが〈夜の学校〉ふとおもえり

おろかだという声がして空蝉ばかり手にて零れる

ゆうやみにせまるひとありきりどおしぬけていま落ちたり

早漏治すべく運動ももはやだれも愛するものなくって

beadhead　聴きつつ天気予報覧る　そうかあさっては嵐

いまさらにきみを忘れる土臭い搬出口を見送りながら

皮膚を突く棘　そのままに世界はあり北半球に秋は来たれり

おれの名を忘るなかれと云いそびれまたこの室に蝦蟇眠りたり

あとがき

祈りでは主に嘆願なんかできやしない

ジム・モリスン

5年まえに初めての歌集をだした。2年まえから歌誌『帆（han）』を主宰し、短歌についての考えを言語化して来た。わたしはそれまでの言語表現を短歌一本化するため、小説を片づけ、詩を片づけてきた。この歌集は歌人としてのわたしの第一歩だ。多くの方法から三十一文字を撰んだということの証のようなものだ。先月、刊行した最後の詩集『不適当詩劇』とおなじく、書き下ろしというかたちをとって、書きためた多くの歌篇を未収録のままにした。それはいつか編輯するとしても、この歌集こそがいまのじぶんの可能性を極めた1冊のつもりだ。

短歌をやっていてつくづくおもうのはもはやもどり道はないということだ。言葉の即時性、即効性という面で、短詩の伝統詩形を超えることはできない。散文表現はけっきょく現実原則の再現でしかないからだ。わたしはもうこの数年、ノンフィクションを除いて、そういったものが読めなくなった。

じぶんのなかで散文家としての側面が失われたことで、その受容体も一緒になって消えてしまったようにおもえる。いささか寂しいが、それもしょうがない。わたしは短歌の律によって、現実原則から空想原則に梯子をかけようとおもっている。詩の作用とは此岸と彼岸を結ぶことである。寺山修司は〈リズムはつねに現在進行形である〉と書いている。読み手と書き手が共有し、且つ共謀するリズムによって一行の詩を完成させる、――これは再現でなく、生成なのだ。わたしが日常を祝祭化ができるのは定型詩文に於いてのみだ。

短歌という呪術を最大限に活かしたい。それは五・七・五・七・七を守るということではない。いまあるリズム、すなわち集団としての国家への挑戦であり、暗数としての声による発語である。わたしはただ見きわめたい、現実と、幻想の地平を。共感といったものにはまったく興味はない。わたしにあるのは変身への渇望である。一瞬のうちにひとりの運命すらも変えてしまう歌を求めている。祈りではだめだ。――「では、お見せしよう――変身！」。

’24年8月・某所にて

著者来歴

中田満帆　なかたみつほ／’84年生まれ、神戸市・出身在住。’04年より詩人・童話作家＝森忠明に師事。定時制高校卒業後、居場所を転々として過ごす。郵便配達人、倉庫作業員、一般土工などに従事。’11年より神戸市中央区に定住。作品の販売を始める。’14年より出版局『a missing person’s press』を主宰、詩集、小説、画集などを出版。’19年に歌集『星蝕詠嘆集／Eclipuse Arioso』を出版。現在、歌誌『帆（han）』を主宰。

森　忠明　もりただあき／’48年生まれ。詩人・童話作家。立川市出身。『高3コース』投稿欄を経て、寺山修司に見いだされ、以後師事。演劇実験室『天井桟敷』、初代文芸部長。童話作品に『きみはサヨナラ族か』、『グリーン・アイズ』ほか。詩集に『ハイティーン詩集』、エッセイ集に『ねながれ記』、『ともきたる――空谷跫音録』ほか。

本作は書き下ろしである。

世界樹の断面

Copyright © Mitzho "Mampan" Nakata, a missing person's press 2024

著作・編輯・装丁・写真・発行／中田満帆

題名・序文／森忠明

発行所／a missing person's press

発行日／2024年09月09日・初版第1刷

神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

［電話］078-200-6874［Mail］mitzho84@gmail.com

ISBN978-4-9909502-8-6 C0092 ￥2500E

Printed in Japan

Made in Kobe